



2012. November
第 9 号

日本演出者協会 協会誌「ディー」

題字 千田是也

新劇の代表的演出家・千田是也氏の文字をロゴデザインに使用。

(資料提供／早稲田大学坪内博士記念演劇博物館)

特別対談『劇団で食うために。』
成井 豊 × 横内謙介

Contents ■■

- | | |
|----------------------------------|---------------------------|
| ■特別対談
成井豊×横内謙介「劇団で食うために。」…… 2 | ■入会・退会 …… 13 |
| ■国際演劇交流セミナー …… 6, 7 | ■部会だより …… 14 |
| ■演劇大学(演出家・俳優養成セミナー) …… 8, 9 | ■若手演出家コンクール 中間報告 …… 15 |
| ■コラム(演出者ワンポイントレッスン) …… 9 | ■日本演出者協会事業担当 …… 15 |
| ■各地域活動通信 …… 10, 11 | ■アンケート(教育の中の演劇) …… 16, 17 |
| ■フェニックス・プロジェクト …… 12 | ■新入会員紹介 …… 18, 19 |
| ■総会報告 …… 13 | ■在外研修報告 …… 19 |
| ■理事会報告 …… 13 | ■データで見る …… 20 |
| | ■編集後記 …… 20 |

日本演出者協会誌「D」(ディー) 第9号 定価＝無料 2012年11月1日発行 平成20年11月創刊(毎年2回発行)

【発行人】和田喜夫(理事長)【編集人】篠崎光正(広報部長)【編集委員】篠本賢一／三谷麻里子／小川巧治朗／大杉 良／緑川憲仁【インタビュー編集】鷺谷賢樹
【発行所】日本演出者協会 東京都新宿区西新宿6丁目12番30号芸能花伝舎3F(〒160-0023) 電話03-5909-3074
【編集・制作】日本演出者協会広報部協会誌「D」編集委員会【題字】千田是也「Marionetto」より【印刷所】有限会社一光堂印刷
【表紙デザイン】前嶋のの【本文デザイン】奥秋圭

劇団で 食うために。

日本演出者協会広報誌『D』
特別対談



横内謙介

劇団扉座

成井豊

演劇集団キャラメルボックス

写真：相澤心也

「高校演劇の神」の意図

——高校演劇など、若い人たちが神さまのように考えるおふたりです。当時を振り返るに、高校の大会の審査に出かけても必ず出てくるというか。なぜ、高校生にあんなに支持されたとおっしゃいますか？

成井■単純にわかりやすいからかと思ってました。まずは脚本のわかりやすさですけど。私たちの劇団はDVDを販売しているしCS放送もしているために、どう上演すればいいかもわかっていうんですね。なので、高校生がまったく同じ演出をしているのを見てちよつとがっかりするところもありました。でも、若い人が演劇の道に入る入口の役割を果たせたんじゃないかなと思うんですよ。そのことについては、半分、そうありたいって気持ちもありまして。私たちは1時間の芝居をずいぶん前からやっているんですけども、高校演劇のコンクールには1時間という枠があるんですよ。高校生に上演して欲しいからやったことでは必ずしも無いんですが、でも、高校生のお客さんが増えた大きな理由になつてると思

うんですよ。

——いま思うと、わかりやすく、時間的にもやりやすく、見本のようなものもできているという、いたれりつくせりなところですよな。

横内■成井豊のキャラメルボックスとは違って、実は僕らは長いこと高校生のアイドルだった時期って無いと思うんです。でも何年間か僕ら、高校生にタダで観せてましたね。初日レビューと言って。たぶんね、自分が高校演劇から出て、横浜の青少年センターで受けた高校生向けの無料ワークショップや格安鑑賞会は僕の原点だつて気がするんですよ。彼ら、きつとお金を出して芝居を観ることはないのかもしれないけど、いちばん最初にそういうものに触れたら広がるって確信があつて。それで高校生がやってみようって思つてくれたことはあつたんじゃないですかね。ホントはその人たちがいま支えてくれていい気がするんだけど、来てないですね。おかしいな(笑)。

成井■わかりやすさって強いストーリーの牽引力かなつて思います。私は70年代につかこうへいさんのお芝居を観て芝居

「高校演劇の神」とも呼ばれたおふたりの対談。

劇団を続けることとはどういうことなのか。

劇団とはどのような存在なのか。

ガラパゴス化する劇団の終末像とは。

長く続けることから見える、本質を射る発見の数々。

対談：劇団で食うために。 成井豊 × 横内謙介

を始めたんですね。横内さんもそうだと思うんですけど、我々の年代って高校時代の「つかシヨック」って大きいんですね。いざ自分も芝居始めようと思つて大学入つてみると、80年代が始まつて、ストーリーがあまり無いお芝居の全盛の時代だったんです。そんな中で我々の年代って、もう一回ストーリーの強い芝居をやるうって思つたんじゃないかと思うんです。私たちとか横内さんとかいのうえひでのりさんとか。得意なジャンルは違うけれどもストーリーの牽引力を信じるってことなんじゃないかと思うんですよ。で、高校生にはSFタッチでラブロマンスがあつたりとか、私たちのがとつきやすいんだと思います。

横内■自分は高校のときに会つてたんで。僕が初めて芝居を、つかこうへいを観たのが15歳のときなんで75、6年なんですよ。大学入つて劇団を始めたのが80年代。私が入つた早稲田大学ではアングラが全盛期だし。高校演劇なんて世の中からも演劇界からも無視されてた存在なんですよ。まだまだ主流は昔ながらの演劇で、メイク講習会といえど鼻に粘土つけていかにガイジンになるかと大まじめにやつてたし。発声にしても鼻濁音を正しく出しましうって審査員が言つてた時代ですね。『父帰る』なんて平気でまだコンクール出たもんね(笑)。一方で実際僕らが芝居始めた頃、主流だったアングラというのはすごく、垣根：出家：なんでしょうね(笑)。とりあえず剃髪して全裸になつて(笑)、よだれをたらして不思議な呪文を唱えないと演劇界に入れてもらえないぞ、みたいな。そういう感じがあつたじゃないですか。文学少女だった先輩が大学入つて急に不良っぽくなつて「芝居はサ」とか言つて梶芽衣子みたいになつちゃつたり(笑)。僕は高校のときからそのままやつて、アングラの先輩たちにすごくバカにされてたんで。ある意味、そういうものに対する反感というか。普通のやつがやる演劇、つまり、普通の高校生や大学生でできる演劇を追求しよう。いわゆる「アングラ大学生」とは違うスタンスを、意図的にとつた覚えはある。だから「善人会議」っていうふうにしたし。アングラに

対抗してね(笑)。「良い子」でもできる演劇をやる。同じ頃に、鴻上さんとか野田さんとか出てきてくれて、僕らがやろうと思ってることを大きく道を広げてくれたというか。

成井■実際、ずっと高校生が来てくれてましたし、キャラメルボックスのお客さんは若い子ばかりだと言われたりもしたんですが、近年はそうじゃないですよ。お客さんの平均年齢は17と21歳くらいだったんですけど、いま30代前半くらいになってますね。それは題材の変化が原因です。自分分はもう20代の若者の冒険とか恋愛は書けないですから。どうしても30歳以降の、家庭を持った男の、親と子の関係とか、題材が変わってくると高校生は楽しめないだろうなと思います。あとは料金ですよ。いま6500円でやってるんですよ。それをこの不景気の時代の高校生に出せつてのはとても難しく。だからウチは各高校の演劇部招待と割引をずーっとやっています。そうしても、来ないんです。電車賃がもったいなかったりして。

——値段の問題はありますよね。一方では、助成金をもらっているところでは30000円以下でやるようになってるし。
成井■そうなんです。高校生がわんさか来てくれてたころって、ウチのチケット3500円くらいなんです。それで、半年に1回、おこづかい貯めて来てくれたんだと思うんですけど。いまは難しいだろうなと思います。

横内■さっきの話でいくと、もしかしたら、高校生に近い世代の若い演劇人たちがあんまりそういう子と呼ばうとしてないんじゃないかな。なんか、数を広げようと思ってるもんね、いま。若いユニットの人たちは1000人呼ぼうとか2000人呼ぼうとか、そういう会話とんと無いじゃない。ほんとバブルの時代の会話だと思っけど、何万人呼んだとか、もう目方で勝負みたいなどありましたもんね。いまそれぞれ

れの演劇活動を見ると人数を呼ぼうって感覚じゃないから。たとえばそこで、よく分かりもしないかもしれない高校生を呼んで客席を埋めようなんてこと、思っけないんじゃないかって。僕らもはや内容的にも、高校生を呼ぼうとか思ってないです。

劇団であり続けること

横内■10年ちよつと前かな、平田オリザさんは友人でもあるし同じ時代を生きてきた同士でもあるんでシンパシーを感じつつだけ。彼は「都市に祝祭はいらないんだ」って出てきた。僕ら小劇場時代ってさ、祝祭ってほどじゃなく文化祭程度のことでしたけど(笑)、街のあちこちでそれぞれが文化祭を小さく、それでいて熱くやって、出合いの場にしてくれとか思いながら一生懸命お祭り作ってたけど。あるとき平田オリザが出て。かつこ良かったのは「我々が求めているのは小さな聖堂であつて、そこでお祭りをするのではなく自分を見つめればいいんだ」みたいなことを言ったり(笑)。こっちは文化祭だから高校生とかも来てくれないと困ったんだよね。でも平田くんたちはね、自分に目覚めた人が密かに祈りを捧げに来るようなところだから高校生もあまり来ない(笑)。それで、僕らが自分たちでやっていることがすごく古臭く感じるようになってしまった時期もあります。でもそれもあまり続かないんじゃないかと思つて。たしかに平田くんの言うとおり、バブルの時代は都市が全部祝祭だった。いまちよつと寂しくなってますもんね。やつぱりもう一回、人が集まってるんか元気になっていくようなものを、ちよつと意図的に起こそうじゃないかってことにシフトしていききたいな。だから劇団がんばってる理由もそこだと思ってるんですけど。もう一回、波を。なんかニシンを待つ北の漁民みたいだけ(笑)。

いわゆる「アングラ大学生」とは違うスタンスを、

意図的にとった覚えはある。

【横内謙介】

対談：劇団で食うために。 成井豊 × 横内謙介

——ほんとに同世代なんですね。

横内■でも僕たちはキャラメルボックスみたいに明確な独自のスタイルというものはないんで。そこも反省するところなんですけど。劇団性というか、独自の色をそこまで作ってたのはなんだろうって逆に訊いてみたいとは思っ。

成井■やつぱり突出した才能がなかったことが大きいと思います。集団でやっていくしかなかったんです。あとは、うちのプロデューサー(ネビュラプロジェクト社長・加藤昌史氏)が演劇だけでメシを食っていくんだって目標を立てたんで。そのためには年に5、6本やらないと食えない。テレビに稼ぎに行けないわけだから。そういうポリシーにうなづいた奴らだけが入ってきた。

横内■自分たちのスタイルはものすごく守ってるって言ってたじゃない？ それともそう見えてるだけなのかな？

成井■それは結果論のような気がするんですけど。ひとり、とんでもない天才がいたら、こんな劇団にならなかったと思うんですけど。ウチにはただひとり天才がいるつちやいたんですけど、それがプロデューサーだったんですよ。その人が「芝居だけでメシを食いたいんだ」って言ったからそういう劇団になっただけであつて。

横内■あるていど作家性を追求すると、毎度まいど明るく元気でポジティブなメッセージじゃなくてさ。どこかで社会に冷水を浴びせたいとかさ、ちよつと裏切りたくなるというかさ、元氣じゃない俺もいるんだぞみたいなこととかありそうだけども、あまり出してきてないじゃない？ くじけた姿とかさ(笑)。

——たぶん自己規制があるんじゃないですか。たとえば、こんなのやりたいけど高校生はたぶんダメだなとか。

成井■えーとー。ないですね。高校生に受ける受けないでネタの選択は一切しません。でも、キャラメルボックスのサポーターズクラブは15000人いるんですよ。その人たちのことは考えます。年に5回も6回も観てくれる人たちをいかに満足させるかは、それは当然考えます。でも、その人た



成井豊 (なるい ゆたか)

1961年埼玉県飯能市生まれ。早稲田大学第一文学部文芸専攻卒業。高校教師を経て、1985年に演劇集団キャラメルボックスを創立。以来現在まで、同劇団の脚本と演出を担当。そのかわり、小説やテレビの脚本を執筆したり、大学で非常勤講師をつとめたりしている。代表作は「ハックルベリー」にさよならを」「ナツヤスミ語辞典」など。

ちのことしか考えないと年々減ってっちゃうんで。自分は、ライバル会社がデイズニーランドと劇団四季とスタジオジブリだと思ってるんで。くじけた姿なんか論外ですよ！ キャラメルボックスはそんなことする場じゃないんです。だいたい食いたいんです。食わなきゃいけないんですよ。くじけた自分とかそんな甘えたこと言ってる場合じゃない。私たちは仕事としてやってるんで。

横内■僕らはそれほどお客さんが増えなかったんだよね。昔はキャラメルボックスと同じくらいだったのになあ。どうやったら増えるのか(キャラメルボックスへ)まじめに聞きに行ったこともあったよね？ でも「君らの真似したんだよ」って加藤君に言われて、意外に思ったりして。やつぱり、作るものにそういう視点みたいなものが欠けてるんでしょ。ね。そこまで自分を律せないというか。平田くんが出てきたらとりあえず真似ちゃうとかやつちゃうし。ただ、生きていくってことはすぐ考えますよね。当時はあんまり貧乏臭いとお客さんがそこに対して共感を持ってくれないような。大真面目に言われたもんな。「第三舞台はブランド着てるぞ」って(笑)。なんの話でしたっけ(笑)。生きていくってことを考えた時に、お金とか大事だし、僕らも社会生活をしていか

ないといけない。アングラ以降は大事なことでした。たまたま僕の場合、自分の台本書きを買われたんですよ。商業演劇とかにすぐ早く。それもバブルの時代の恩恵だと思ってます。もうちょっと僕らが早く生まれてればもっと企業に取り入ってもっと多くのお金を持っていたと、いまになって思いますけど。あの時、僕ら自分で望まなくても企業のほうから「50万、宣伝費あげようか。そのかわりガム置かせて」とかね。ちよつとした広報部員が月に100万くらいの金が自由になるとか、ホントに言っていた時代だから。結構恩恵を受けていたんです。

成井■横内さんの話を聞くと、いい時代だったんだなーって。**横内**■その時は思わないんだよ。当たり前だと思ってるから。**成井**■でも逆に、僕ら鍛えられました。なんにも頼れないんで。スポンサーなんてどこにもいないから、自分たちでサポーターズクラブ作ってお客さんに支えてもらうとか。自分たちで考えるようになりましたね。

劇団はガラパゴス化する

成井■こんど有川浩さんと僕で共同原案で、有川さんが小説を書いて僕が芝居にするっていう小説家とのコラボレーションをやるんです。前にやった恩田陸さんのときとちよつと違って。原作ものをやり始めて、元々は借りるだけだったのが、一緒にやりましようって。これは助かりますね。自分一人ではなかなか新しいものが書けないですから。キャラメルボックスって演劇界の離れ小島のせいか、演劇界の知り合いってほんとと少ないんですけど漫画家さんとか小説家さんだったら縁がある。ぜんぜん違う刺激ですから勉強になります。いま話して気がついたんですけど、そういうことにかまけてて演劇ちゃんと観てないなって思いました。

自分は、ライバル会社がデイズニーランドと

劇団四季とスタジオジブリだと思ってるんで。

【成井豊】

対談：劇団で食うために。 成井豊 × 横内謙介

横内■いま離れ小島とおっしゃったけれども。劇団なんてどこかでガラパゴス諸島みたいなところあるじゃないですか。そもそも、日本語の正しい発声とはなんなんだと。たとえば誰の、どここの劇団の発声法は正しいとか。まったくないですよ。でも、高校演劇の審査員は「正しい発声でやりましょう」というから正しい発声ってある気がするじゃないですか。それでみんなお腹ペコペコして「あえいうえおあお」やったりするわけですよ。だけど「ただお腹へこまして駄目だよ」とか言われて、それからいろいろ「行脚」するわけじゃないですか。劇団四季の人に会えばこれが正しい発声法だって喋り方があり、そういう喋り方をしている俳優が蜷川幸雄に怒鳴られている姿を見て(笑)、かと思えば蜷川演出を晩年の三木のり平さんが見て「小屋の外にセリフ聞かせてどうすんだ」と言う、みたいなことをさ。とにかく俳優は大変だなんて思うんだよね。たとえば浅利慶太と蜷川幸雄が日本を代表する演出家だと世間的になっているときに、ふたりのところでまったく別の技術を使い分けないと仕事にならない。なにをもった正しい発声というのか。ちゃんと客に届けばいいとしたか言いがたない。けっきょくさ、自分で世界作って、観客におもしろいと言われた人が、いいんだと。なんか正しくやろうとかスタンダードなものを求めてもまったくそれが見えてこない。浅利慶太さんとかガラパゴス進化なんだよなって思ってた。けっきょくさやっつて進化して生き残ったもの勝ちなんだなって。だとすれば離れ小島もいいもんだなって。

成井■あつはつは(大笑)。**横内**■もちろん影響し合わないのもつまらないけど、独自進化をした稀なるものって逆に天晴れなのかもしれない。

成井■私ずっと新人練習やってますんで、素人の役者がいかに共鳴する声を出せるようになるかと感情開放するようになるかって方法論はずっと追求してます。毎年毎年実験をして、やつとば自分たちのやり方が固まってきたかなって感じます。で。正しい演技法はないし正しい発声法はない。でも、共鳴する声の方がいいし、息は長く続いたほうがいい

し、滑舌もいいほうがいい。それに至るアプローチの仕方が声楽の先生によって違うわけだけでも、サンシャイン劇場でデビューしてひと月公演しなきゃいけない劇団の新人が、なるべく短期間でどういう練習をすればいいかを、二十何年研究してきたわけです。それが万能だとはもちろん思っていない。でも、そういう部分にはちよつと自信があります。

——二十何年それを修正しつつ研鑽したものはどっかでそれをまとめたほうがいいんじゃないですか。逆に、そうして作ったもので、芝居じゃなくて、全国をまわるとか。

成井■ワークショップ的なことですか。キャラメルボックスでやってるお芝居ってナレーションが必ずあって、これは他の劇団と違うところかなって思うんですね。役者がお客さんに直接物語りながら実演もして芝居をやっていくっていうスタイルが私たちの劇団特有の演出法であると同時に演技法になつていて、お客さんに向かって話しかけるんです。よく向かい過ぎると言われるんですけど、それでいいと思ってるんですね。現実を再現してお客さんに「第四の壁」から観てもらうのが演劇だ、と思わないんですね。僕らはお客さんに立ち向かっていく演劇だと思う。それができるための育成法なんです。クラウンもそうですよね。で、その見本が東北の被災地に持つった『賢治島探検記』という作品。これはどこでもできるんですよ。屋外でも上演できるスタイルなんです。これを持つてく手はありますね。被災地だけじゃなくいろんなところに。これを観てもらえばわかる。ただし、お金はかかりますんで。いま不景気でなかなか難しいですね。

終息のさせ方がわからない

横内■劇団はどう終息させるんですか。僕はもう30年やっちゃったんですけども、あのととき立ち上げた劇団でまともに残ってるのは数少なくなつて。僕がいま真剣に考えてるのはどう終息させるのか。もうとくに耐用年数は過ぎてるんじゃないかって。なにか起こった時に他人様に迷惑をかけると思うのね。たとえばね、成井豊がなにもやらなくなつたと

きに二代目がね、お世継ぎが劇団という枠組みを引き継いでいくというイメージなのか、成井さんがやめるときが劇団の終わるときなのか。ぜんぜん考えてない？

成井■いや。一時考えて、それで脚本家演出家の養成もしました。でもなかなかうまくいかないんですね。もう成り行き任せにしようと思ってます。ただ、原作ものが増えてきてその演出の方法論が確立されていけば、僕がいなくても他の人ができるんじゃないかとは思ってます。まだいますぐは無理でしょうけど。歌舞伎は、作家や主演男優が変わっても変わらないじゃないですか。原作ものをサンシャイン劇場で2時間でやるっていうスタイルはもうすぐ確立できる。そうすれば僕じゃなくても、もつと若い20代30代の人でもできるんじゃないかなって。そしたら僕が続けようが続けまいが続ける可能性は残せたなつてこと。



横内謙介 (ようこうけんすけ)
劇作家・演出家・扉座主宰 日本劇作家協会副会長。
1961年、東京都出身。'82年、扉座の前身「善人会議」を旗揚げ。スーパー歌舞伎等に作品を提供。
『国民文化祭ふくおか』構成・演出、愛・地球博『地球タイヘン大講演会』脚本・演出、NHKBS2『深夜劇場へようこそ』司会、ドラマ『ダンドリ』脚本等。'92年岸田國士戯曲賞受賞。'99年大谷賞を史上最年少で受賞。

横内■じゃあどつかで続くことを夢見てるとか(笑)。

成井■それはね、難しいんですよ。一時ほんとうに劇作家・演出家の志望者をとつたんですけども、育成が難しいんですよ。法に触れるようなギランティしか払えないで「しごく」ってのはホントに難しい。しごいても、ちゃんと休みがあつてちゃんとギラがもらえてれば言うこと聞いてくれるでしょうけど(笑)。お互いアーティストだから、ものを教える教わるの関係じゃ本来無いはずじゃないですか。

横内■ただ二十何年培ってきた技術を習得できてる俳優がたくさんいて、それをもう一回作れつてのは不可能じゃないで

対談：劇団で食うために。 成井豊 × 横内謙介

すか。あなたの台本をばつと渡されて、それこそ歌舞伎のよう、自分の立ち位置から演技から役者が自動でしつかりできて。このコストのかからな具合。それはもう長い蓄積があつて、お客さんにも愛されているもので。すごい財産だよ。僕らだってホントに速いものね。台本渡して、稽古初日にはもう準備できる。こつちも当て書きしてるし。こういうことやるんだらうって準備ができて。稽古はするけど、最初からの手取り足取り説明してつてのがぜんぜん要らないってことの凄さを最近感じるのね。長くやってるってこういうことなんだな(笑)。簡単に無くしたくないけど、これを維持していくってどうなのか。それつてみなさんどうなさるんだらう。辞め方がわかんなくなつて(爆笑)。

成井■それは自然消滅がいちばん楽なんじゃないですかね。

横内■ぜんぜん考えてないんだね。

成井■先はわかんないです。いま役者は35人でこいつらはいいんですけど、制作部は25人いるんで、この人たちは月給払わなきゃいけないですから。そうなんです、その人たちの生活があるんですよ。なので、やっぱり2か月に1回は公演打たないと給料払えませんか。

——もう回っちゃってるから止めらんないってことですよ。

成井■だからむしろ僕が急病で倒れたときにちゃんと回つてるようにならないとまずいんですよ。それは考えるんです。芸術家としての考えじゃないですよ。いち企業人みたいですよ(笑)。

横内■普通の会社だったら社長変わつても業績伸びたりするけども、キャラメルボックスは成井豊が書いて演出やつてないと。他の人が来ててもきつと混乱が起るだけ(笑)。

成井■(笑) そうじゃなくて済むように！ いまそれをなんとかしようと思ってる。でも、あと30年も50年も続いて欲しいと、必ずしも思ってるわけじゃないですよ。ダメならやめちゃえばいいんで(笑)。

——でも制作25人もいたらずっと続きそうな気がする。

成井■まあ食わないと思つたらね(笑)。

タイ特集

日本の民話を劇化する創作ワークショップ
(報告：前嶋のの)

日本演劇界についての研究の為、一年間東京に滞在していたタイ人演出家プラディット・プラサートン氏(愛称トゥア)を講師に迎え、ワークショップとレクチャーを開催した。松山の会場となった「シアターねこ」は、以前幼稚園だった建物を劇場・稽古場として改築した場だ。今回のセミナーがシアターねこにとってのオープニングイベントとあって、地元の新聞社やテレビ局が数多く取材に訪れ、新たな小劇場に対する注目度の高さが窺えた。

ワークショップのテーマとなったタイの伝統芸能「リケエ」は、日本でいうと大衆演劇に似た存在だという。背景が描かれた布などの簡単なセットのみで、村から村へ移動しながら上演される。伝統楽器で構成された生バンドの演奏にあわせて、歌うように台詞を言うスタイルのストーリーを題材にしつつ、楽器演奏、台詞、動きなど、すべては即興で行われるという。参加者たちはまずこのリケエスタイルを体験することになった。打楽器で一定のリズムが打たれる中、リズムののって一人一人即興で言葉を発していく。リケエにおいてはこの即興性が重要であるとのこと、自己紹介から台詞のやりとりと、即興が繰り返された。始めはルールや緊張に縛

2012年5月24日〜27日シアターねこ(松山)
5月29日〜6月3日 芸能花伝舎(東京)
講師 プラディット・プラサートン
通訳 千徳美穂
担当 前嶋のの、林英樹
参加者 松山WS17人(男11・女6)
見学者27人 レクチャー26人
東京WS15人(男7・女8)
見学者20人 レクチャー13人

られていた参加者たちだが、徐々に表現が大胆に、伸びやかになっていくのを感じた。

ワークショップ後半では、日本の民話を題材にし、グループでの作品創作に取り組んだ。物語からヒーロー、ヒロイン、悪役、道化のキャラクターを選び出し、それぞれの配役で参加者がシーンを演じていく。松山では随所に歌や舞も取り入れられ、色彩豊かな作品となった。東京では発表直前に講師の意向で配役が変更され、参加者はまさに即興で役を演じることとなった。

レクチャーでは前半にタイ演劇の歴史と現状を、後半では講師の生い立ちからこれまでの仕事を、どちらも写真と映像を交えつつ紹介された。東京のレクチャーでは、終盤司会者や参加者からの質問に答える中で、スラムの子供たちとの創作活動の内容、自分の作品の分析、また様々な活動におけるエネルギーの根源について、などが語られた。



国際演劇交流セミナー2012 報告

モルドバ特集

イヨネスコ作品の舞台創造
「創造の謎に向き合う」
(報告：山口浩章)

モルドバ共和国よりイヨネスコ劇場の演出家で、芸術監督であるペトル・ブトカレウ(Petr Butacu)氏を招いて、京都、金沢の2都市で、ウージェーヌ・イヨネスコのテキスト、京都では「二人で狂う」好きさだけ」金沢では「禿の女歌手」をそれぞれ取り上げ、演出と演技のワークショップを行った。

ワークショップは、それぞれ4日間にわたって行われ、京都では11名、金沢では21名が参加した。期間中、それぞれ1回ずつシンポジウムも開かれ、イヨネスコ作品を創作する動機や、テキストに関する意見などが話された。

京都でのワークショップ参加者は、男性6名、女性5名。年齢では20代6名、30代4名、40代1名。役割別では演出家4名、男優4名、女優3名だった。金沢は、男性8名、女性13名。10代1名、20代4名、30代5名、40代7名、50代3名、60代1名。役割別では演出家4名、男優5名、女優12名だった。

最終日の成果発表会を含め、四日間のワークショップは、一般公開されたため、見学者も両会場共に10人ほどが参加した。

今回は、特にイヨネスコのテキストを中心に置き、チームを作った作品創作のワークショップであり、イヨネスコのテキストは解釈や、表現

2012年7月28日〜31日 元・立誠小学校講堂(京都)
8月2日〜5日 金沢市文化ホール練習室(金沢)
講師 ペトル・ブトカレウ
通訳・翻訳 志賀重仁
担当 岡井直道/山口浩章(サブ)
参加者 京都WS11人(男6・女5)、シンポ18人
金沢WS21人(男8・女13) シンポ28人

の幅が広いだけに、「なんとなく」で創作してしまうと不条理ではなく意味不明なものになってしまう。そのため、具体的に他者に表現し、伝えることの大切さや難しさを認識することが出発点となり、ワークも講師が一方的に教えるというよりは、互いの認識を理解し合う、相互に意見を出し合うものとなっており、こうした体験は、参加者の今後の創作過程や、観客を含む周辺地域、社会とのかかわり方にも活かせるものになるであろう。

ここからさらに、具体的な演出、演技プランで議論が交わされるようになるには、四日間では時間が少なく、中堅クラスはまだしも、初心者や、若手はどうしても受け手に回ることが多かった。こうしたセミナーを続けて行っていくことで、創作の場を活性化させることが出来ればと思う。



国際演劇交流セミナー2012報告

ドイツ・トルコ特集

できる演出家のためのブレンストーミング
「ちょっと広げてみようか」

ギリシア喜劇・アリストパネス

『アカルナイの人々』を巡る

ヌルカン・エアプラートSHOWCASE

(報告)左藤慶

「魅力的な上演を実現する為のテキスト読解力」「イメージやアイデアを伝え切る為の演出言語力」「自身の感覚、感情、思考、行動を真摯に振り返る為の自己内省力」といったこれからの演出者に必要とされる能力を拡大させようという試みは、昨年のスイス特集に続き二回目。

今回取り上げたテキストは、アリストパネスの『アカルナイの人々』。いつ終わるとも知れない戦争の中で書かれ上演された本作品には、二千五百年前に書かれたにもかかわらず、現在の私たちにとても他人事ではない様々な問題が描かれている。ブレンストーミングを進めていく中で、この作品は単なる反戦劇ではなく、二義性(両義性)を持った作品であるということが参加者間の共通認識となった。

舞台美術家や俳優も参加していたが、今回の参加者は殆どが演出家で、一人一人がアイデアやイメージを持ち寄り、互いに比較・交換しながら、各自の理想とする上演プランを練り上げていった。五日間に渡り様々な切り口から話し合い、読み深めたことで、一人で戯曲を読んでいるだけでは気付けないことも考えが及び、普段の創作現場では味わえない発見をした参加者も

2012年8月21日〜26日(東京)、28日〜9月2日(大阪)

ドイツ文化センター(東京)・スタジオ315(大阪)

講師 ヌルカン・エアプラート

レクチャーゲスト 篠本賢一、鴻英良、久保田忠

利、野津寛(東京)／菊川徳之助、大貴隆

史、正木喜勝、小林標(大阪)

通訳 黒田谷子、秋野有紀、金子沙織(東京)／

担当 小野紗也香、荒西麻記子(大阪)

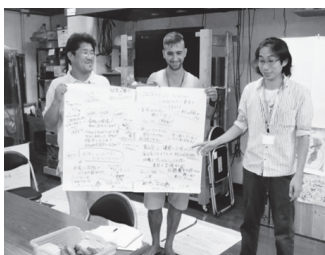
田中孝弥・佐々木治己・左藤慶

参加者 東京11人(男7・女4)、見学のべ49人

大阪3人(男2・女1)、見学のべ22人

少なくなかった。

講師ヌルカン・エアプラート氏は、ドイツで活躍する注目の演出家。トルコ系移民という背景を持ち、移民問題や移民文化を扱った演劇作品の評価も高い。ブレンストーミングでは、参加者達に多くの刺激を与えたいと、時に挑発的に、時に批判的に働きかける姿が印象的であった。戯曲を上演するにあたり、何を?何の為に?どのように?といった思考プロセス、彼自身の演出ノウハウを惜しみなく披露してくれたことも、参加した演出家たちは勿論のこと、運営側にとっても、今後に繋がる貴重な体験となった。最終日のレクチャーでは、移民文化を題材にした映画を使い、その歴史や変遷などを解説してくれたが、移民問題に馴染みのない日本人にとって、とても興味深い内容であった。



国際演劇交流セミナー2012報告

国際演劇交流セミナー2012報告

ロシア特集

ロシア・戯曲ワークショップ

演劇教育発祥の地から

『三人姉妹』を巡る一週間

(報告)島守辰明

現在、モスクワの老舗にして人気劇団「ソヴレメンニク劇場」から、演出家であり、指導者でもある、ミハイル・アリ・フセイン氏を招聘した。彼は、モスクワの総合演劇アカデミー(GITIS)で長く演出家コースで教鞭を取った経験があるだけあって、極めて明快に、そして極めて的確な指導を行った。今回はチェーホフの『三人姉妹』を題材に、参加五チームが事前に稽古をしてシーンを見せることから始めた。始めの二日は、各シーンに於ける作者チェーホフによって「与えられた状況」を分析。言葉に惑わされずにどう分析できるのか。即、各チームの演出家への課題。翌日すぐに発表、そして分析。この二日間を経て、第二段階へ。行動分析というもの、そして演出家の俳優との関わり方、そしてコンポジション。これらを各チーム自主練しながら二時間づつ、ミハイルと演出家、そして演出家それぞれの稽古視察、そしてメッセージと練り返すことで、各演出家個人のイメージの持ち方、俳優との仕事の仕方、そして構成員までを適確に、そして無駄なく練り上げていく。最終日の発表では、初日とは比べ物にならないほど飛躍しながら、演出、俳優それぞれの個性と刺激に充ちた小品集となった。「文学的」よりも



「演劇的」、「自然・写実主義」よりも「説得力」、そして「論理力」以上の「行動力」、という明確でありながら正に嵐のような五日間となった。終えてみて、「ショックだった」「5日間とは思えない密度」「考え方そのものが変わった」など、脳をフル回転させたことを物語る演出家たちの感想を得ることができた。特徴的だったのは、イメージ、構成、稽古方法など、すべて演出家自身に考えさせたことである。演出家への、そして俳優たちへの刺激の与え方には、高圧的であったり教条的である点があった。スタニスラフスキー・システムそのものがそういうものである、そしてあくまで実践的なものである、という極めて具体的な提示であったと言える。

2012年8月22日〜26日

大手前大学さくら風川キャンパス内CELL(セル)フォーラム(兵庫県西宮市)

講師 ミハイル・ヤコヴレヴィチ・アリフセイン

(ロシア国立モスクワ・ソヴレメンニク劇場演出家)

通訳 安達紀子

担当 島守辰明(兵庫県立ピッコロ劇団文芸演出部)

参加者 WS15人(男7・女8)、シンポジウム24人

学生WS11人(男3・女8)

演劇大学 in こうち

(報告) 大家賢三 (演劇大学高知実行委員会)

昨年に引き続き、二回目となる「演劇大学 in こうち」。演出家7人が来高し、演劇に関するワークショップを通じて、演出の技術や芝居の作り方、表現者としての考え方など多岐にわたる講座が開催されました。

流山児祥氏や和田喜夫氏など、今回も演劇界の第一線で活躍するほとんどの講師が実戦的な講座を開催しました。申し込み者は昨年の81人を大きく上回る131人で、3日間で全18の講座に延べ252人の方が参加しました。

篠崎光正講師は、「シノザキシステム」を中心に、演出の技法や心得について講義し、高都幸男講師は2日半かけて、野田秀樹の『真夏の夜の夢』の一部分を30分程度の芝居に仕上げました。「本当に2日半で仕上がるのだろうか」という心配を余所に、参加者は見る見る顔つきや姿勢も変わり、発表ではしっかりと観客を惹きつける演技をしていました。

高知出身の明神慈^{やす}講師は体を緩める方法や舞台上での所作を伝授し、大杉良講師は高中生に『ロメオとジュリエット』をテキストとして、群読で表現する舞台を創り上げて発表しました。

大学終了後の交流会にも28人が参加し、講師との熱心な語りの中で次回の開催を約束して、演劇大学は幕を閉じました。

2012年4月27〜29日

会場 高知市文化プラザかるぽーと

講師 篠崎光正、高都幸男、大杉良、明神慈

流山児祥、和田喜夫

担当 吉本ちか子、門脇幸

企画制作 演劇大学 in こうち実行委員会

共催 (財) 高知市文化振興事業団

高知市文化・ラザ共同企業体

実行委員の反省会では、参加者は前回は上まわったものの、地元劇団の参加が少なかった、講義の内容の詰めが時間がかかり、印刷やPRへのしわ寄せが見られた、朗読の講座に参加している人にも発表の場があった方が良かったのではないか、などの意見が出されました。

演出家を育てることはもちろん、10年、20年先を見通しテーマを持って取り組み、演劇への関心を喚起し、ひいては演劇人口の拡大に繋がる催しでありたい——演劇大学は1カ所につき原則3回で終了という協会の方針を聞き、あと1回を大切に計画し、次のステップに繋げていきたいと、実行委員は熱く語っていました。



演出家・俳優養成セミナー2012 報告

演劇大学 in こおりやま

(報告) 青木淑子/実行委員会代表

昨年7月、3・11震災後の福島で第1回目の「演劇大学 in こおりやま」を開催しました。郡山市内の文化施設がほぼ壊滅状態の中、また、福島を訪れる事への不安も高まる中、「こんな時だから」という思いで開催したのですが、講師諸氏、協会事務局、郡山市文化センターの支援を受け、のべ100名の参加者に、「演劇の持つ人間力向上効果」を再認識させられ、今年も迷うことなく2回目の開催を決行しました。

7月19日(木)から22日(日)まで、1年ぶりに使用可能になった郡山市文化センターの展示室を会場として、『今年の夏は郡山で、「表現する自分」に出会おう!』という呼びかけにこたえて、昨年のほぼ2倍の参加者が集まりました。

今年の講座は、7名の講師により、「声と身体トレーニング」2講座、「言葉のみで世界を創り出す」(講義)1講座、「非言語コミュニケーション回路を探る」2講座、「朗読コース」2講座、「台本を読んでみよう!」1講座、「4日間作品を創ろう!」2講座の計10講座が開設されました。

今年の特徴は、「非言語表現(身体表現)」の講座を庄崎隆志氏を講師に迎えて開設し、同時に神田陽司氏の講義、大方斐紗子氏の朗読と「言語表現」の講座も開き、「表現の可能性」を探

2012年7月19〜22日

会場 郡山市民文化センター

講師 池内美奈子・神田陽司・流山児祥

野崎美子・庄崎隆志・大方斐紗子

宮田慶子

担当 町聡子

企画制作 演劇大学 in こおりやま実行委員会

共催

郡山市/郡山市教育委員会

郡山市民文化センター

(公益財団法人)

郡山市文化・学び振興公社

ふくしま表現塾「風のうた」

ろうとしたことかと思えます。

各講座の参加者は、のべ213名、最終日の発表観劇者は30名、計243名が文化センターに集まりました。

市内の専門学校の学生など、若い世代の参加者も多く、「演劇の魅力」に触れることで演劇人口が増えることになれば……と願いつつ、実行委員としては中身の濃い「演劇大学」が開催できたことに感謝しています。



演出家・俳優養成セミナー2012報告

演劇大学in千葉

(報告)深寅芥

2回目となる演劇大学in千葉は、1回目と同じく、千葉県八千代市において開催いたしました。

今回は若手演出家コンクール2011にて優秀賞を受賞された、村井雄氏、スズキ拓朗氏を講師陣に迎え、村井雄氏は、御笠ノ氏、深寅芥と同じく八千代市出身です。3人の若手演出家が地元で一同に揃う事となりました。

八千代市出身の演出家が集まるという事もあり、地元メディアから興味を持って頂けました。市の広報、県の地方新聞「千葉日報」にも掲載され、行政からの協力も得られやすくなり前回と比較し、演劇大学in千葉の認知度が広がりました。

受講者数も大幅に向上し、全5講座の開講と発表会の開催までに至れたのも、成果の一つです。開講した講座ですが、

「4日間で作る演劇①」(御笠ノ氏、村井雄氏)
「4日間で作る演劇②」(青井氏、深寅芥)
「流山児祥のシニア演劇講座」(流山児祥氏)
「ざっくり日本演劇史古代から近代まで」(村井氏)
「身体表現ワークショップ」(スズキ氏)です。

2回目の開催をさせて頂き、特に印象的であったのは、受講者の皆様も、講師陣も、皆精

2012年8月25日

会場 八千代台東南公共センター

講師 御笠ノ忠次・村井雄・青井陽治 深寅芥

担当 流山児祥・村井健・スズキ拓朗

後援 佐々木治己

八千代市

企画制作 八千代市教育委員会

演劇大学in千葉実行委員会

極的であったという事です。

交流会においても参加者の多くが夜遅くまで語り合いました。

発表会に向けて一丸となったのもありますが、やはり、「地元の演劇文化向上を育みたい」という意識が根底に存在するのかわかります。発表会をご覧になられた観客の皆様からもそのような声を頂きました。

また受講者の中から、日本演出者協会の会員に加入してくださった方がいらしたのも有り難い事です。

次回開催に向け、更に講師陣と密な連携を深め、より充実した内容と達成感が得られる演劇大学を目指していきます。



演出者ワンポイントレッスンその④ Ustream (ユーストリーム)



中継が
見られる

スマホ

お久しぶりです。今回はユーストリームについてをお話したいと思います。スマートフォンの普及により、私たちの生活にインターネットを通じて生中継というものが出てきて身近になりました。演劇の公演を中継する劇団も見かけます。どうしても者数がつかなくて見に行けないもの、ちょっと興味があるけれどどうしようかなーと悩んでいるものが「Ustream」です。このサービスを利用することによって劇団側がほぼゼロに近い予算で全世界に公演を配信できるので、なんだかもう女明ってスバラシなと思いますよね。強く印象に残っているのは、いわき総合高校演劇部のファイナルファンタジー(以下略します、ごめんねさ)です。東京公演は、

そんなに広い劇場でもなくチケットは完売で、学生しか見れない回もあったので、行きたかった人にはありがたかったし、何より福島の高校(しかもあのいわき総合高校)から震災をモチーフにした芝居が来る、ということでもとても話題でした。「そんなことで劇場に人が来なくなっちゃたらどうしよう…」という不安もあるかもしれませんが、この中継の面白いところは「視覚聴覚がわかる」ということです。どんどん増えてたらそれをネット上で宣伝して更に増やすこともできる。そして中継を見ていても「生の方がいいに決まってる」とはどんな人にも不思議とわかるものです。東京に生んでいる私としては、地方のUstreamがもっとあれば楽しいのかな、と思います。



な…こんなことが起きているのか
〇〇県の演劇界では…

とか、思ったりしたい!!

NHKの劇場中継がなくなりました。今、もっとカジュアルな中継で演劇界が盛り上がっていくことを願っています。本当はコンクールの公開審査とか中継したい。

三谷麻里子

各地域活動通信

福岡ブロック



福岡ブロック活動報告

2012年4月は、前年度末に行った日韓演劇フェスティバルの余波がのこり、日韓の振り返りなどを繰越で行なっていました。その為、演劇大学in福岡の企画が遅れ5月中旬から本格的な話し合いとなりました。

現在、福岡の協会員は20名程度で、3ヶ月に1度ペースで行う総会に参加する会員がその半数程度、更に事業で実働できるメンバーがその半数という現状です。しばらく、ブロックとしての活動が停滞していたので、活発な活動を再開してからまだ2年しかたっていません。新しい顔ぶれで若いメンバーを中心に福岡演劇の未来図を手探りする日々です。昨年度は演劇大学

と日韓演劇フェスという2つの事業を運営することになり、各自の活動と並行して協会の事業を年間に2回も行う場合のマンパワー不足を改めて感じました。

福岡の演劇大学は初年度が運営の中心をNPOに任せた為、ブレ開催と位置づけており今年が地元演出者たちを中心に行う2度目の演劇大学となります。今年度は初の宿泊形式での開催となりました。宿泊形式にすることで参加者の負担金が増額される問題や間口が狭くなる可能性など様々な問題について協会員と話し合いを重ねました。

福岡では2015年に「アジア演劇大学in福岡」としての開催を目指しており、そのファーストステップとして、宿泊形式での開催を企画しました。福岡では、宿泊形式の演劇事業の一例が無く宿泊施設を探すことに時間がかかりました。

8月31、9月1・2日の2泊3日で開催しました。様々な問題もありましたが、寝食を共に大自然の中で演劇と向き合う3日間は参加者にとっても運営側にとっても充実した時間となりました。

来年度はついに海外からの演出者を迎える予定です。演劇大学を終えてまだ間もないですが、今は振り返りと来年度の企画をはじめました。

【山田恵理香／福岡ブロック代表】

10

青森

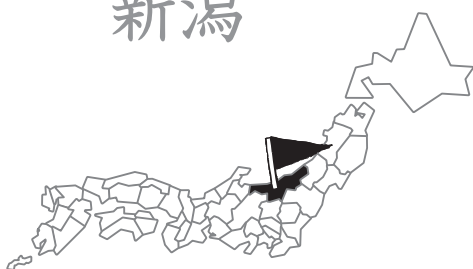


恐山の麓から 膝を抱えて俯瞰する

「アイ ハヴ ア ドリーム…」と20万人に語ったあの人は、その時34才。そして恐山の麓で「私には夢がある…」と、ひとり口に出した言葉を鴉に突かれて、ますます膝を抱え小さくなっている私が、53才。すごいな、キング牧師！ さすがキングってだけあるぜ！

てなことで、恐山から見下ろすと、青森県の皆は生き生きと頑張ってます。なんととっても、青森市の畑澤聖悟！ 全国飛び回る彼の活動はほんと、キングだぜ！ 自身の劇団、渡辺源四郎商店の活躍は言うまでもなく、4月にはそのキングの作演出で『翔べ！ 原子力ロボむつ』を公演。これに負けじと、渋くしぶとく青森市の劇団支木が来年設立50年！ 6月には自身のアトリエで『はやてに走れ あまじやく』を中野健演出で渋く公演。地元に着し活性化と絡めての演劇も、またま

新潟



芸術祭から考えてみる

2012年、新潟県では2つの芸術祭が開催され、全国に発信している。

一つは、『大地の芸術祭、越後妻有アートトリエンナーレ』（十日町市・津南町、平成24年

た火がついてきたぜ！ 平川市では初の市民劇団が8月に『津軽藩 北辺の武士』を華々しく公演したのさ！ この舞台には、ここ、むつ出身の盲目のシンガーソングライター板橋和幸が作詞作曲した歌を役につきながら歌ったんだぜ！ すげーな、板橋和幸！ お前もキングだ！（偉そうだな、おれ）彼は演劇人ではないが、全国飛び回ってるんだぜ！ そこんところしく！

で、俺の夢？…それは、あれだな、やっぱ「演劇大学in下北」…じゃあ、お前頑張れるのか？ って声が聞こえて、膝抱えて、小さく。

【仁木宏／劇団未来半島代表】

7月29日(9月17日)。もう一つは『開港都市にいがた 水と土の芸術祭2012』(新潟市、平成24年7月14日~12月24日)である。

前者は2000年から三年に一度開催。作品を里山に散在させ、招聘アーティストと住民との協働による創作に特徴がある。いくつか演劇・パフォーマンスの作品もエントリーされてはいたが、地元の演劇関係者の関わりは薄かった。

後者は①市民プロジェクト②アートプロジェクト③シンポジウム が事業の柱で、①では新潟の演劇関係者数組が企画し参加をしている。このうち、創るつながるプロジェクト主催の『柱と水の都をつなぐ演劇ワークショップ』では、「水と土の芸術祭を、震災以降途絶えていた仙台市との交流回復のきっかけとして、また新潟市に避難されている被災者とともに市民と演劇が触れ合う機会ととらえ、仙台市の舞台関係者と協働して取り組む演劇ワークショップと発表公演を企画」として実施、震災以降、途絶えていた演劇交流が復活する兆しが見えてくる。

全国との交流を目指し、新潟で演劇大学の開催を実現させるため、8月に県内協会員9名で実行委員会を立ち上げ、企画の検討に入った。縦に長い県内でそれぞれの取組みが動き出している、ネットワークの強化と情報の共有が急務であると感じている。

【井上ほりりん／演劇大学inにいがた実行委員長 演出者協会広報部員】

島根



島根の演劇は歴史のある老舗劇団が活動している一方、若手劇団が少ないというところでもある。

老舗劇団の中でもNPO法人あしづえは創立以来45年にわたって島根の演劇をリードしてきたといっても良いであろう。

全国でも珍しい公設民営劇場しいの実シアターの建設に携わり、現在管理運営している。また3年に一度八雲国際演劇祭を開催。地元のボランティアスタッフの手作りで一般市民、地元住民、演劇関係者が一緒になって盛り上がるフェスティバルとして定着している。その一方で若手劇団は少ない。

高校演劇では毎年のように全国大会に出場する強豪校もあり盛り上がりはあるが、それが若手の活動として定着していないようだ。

また一方では、公立ホールが主催する市民ミュージカルや市民演劇は盛んである。子どもから大人まで参加し、20年にわたり上演されつ

づけている作品もある。

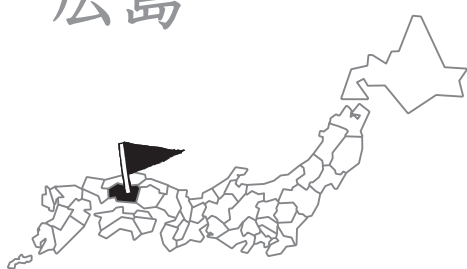
それぞれの活動は特色もあり顕著ではあるが、若手の育成と活動できる環境づくりは今後の課題である。

横のつながりが増え相乗効果を産み出して活性化して行くことが必要なのかもしれない。

現在島根の10劇団でつくる島根演劇ネットなど横のつながりをつくる活動を行っている。

【坂井陽介(劇団Yプロジェクト代表)／島根演劇ネット副会長】

広島



各地域活動通信・広島地域

広島では、地元劇団の公演が増えてきたように感じる。2012年秋には10以上の劇団公演が予定されている。

これまで、「劇団」のような固定団体の形は少なく、プロデュース公演、ユニット公演が多く占めていた。WSは数多く行われていたが、

フリーの俳優が多いため、せっかく学んだ知識や技術を持ちかえって稽古する場所が無かったのである。

しかし、近年は劇団が増え、稽古も継続的に行われている。これまで名前にはありながら公演をしていなかった劇団も、公演を行うようになったり、大学演劇部や演劇サークルから劇団を立ち上げるなど、若い人たちの集団も増えてきた。

これは公共ホールの事業資金が削減されていることに伴い、地元劇団の公演をホールが協力して自主事業にする機会が増えてきたことが原因の一つだと思う。

しかし、これから先が大変である。現在150席未満の会場で行われている公演がほとんどだが、広島には200~300人程度の劇場がないので、一気に大ホール規模の500席程度の会場になる。

ステップアップしていくために、1つの劇団としてではなく、広島全体で観客を増やす企画・取り組みが必要になってくるのではないだろうか。

【越智長江／劇団Tempo】

募集!!

広報部員

情熱のある方ぜひ応募願います

広報部

フェニックス・プロジェクト vol.5 は
2012年8月11日新宿芸能花伝舎にて開催
しました。

フェニックスプロジェクトが始まって、初
めての野外と室内で同時に行われた開催です。
鶴田くに授学基金ビヨンドXプロジェクト(代
表 早川忠孝氏) から多大なるご協力を得て
実現する事が出来ました。

予定時刻の朝10時から野外ステージにて、
日本演出者協会和田理事長の挨拶、新宿淀
橋町会会長挨拶、ビヨンドXプロジェクト早
川代表の挨拶と続き、その後、室内ステー
ジにおいて未来太鼓さんのオープニングセレモ
ニーが実施されました。オープニングセレモ
ニー終了後、大塚町の城山虎舞が10時半から
上演され、多くの来場者の皆様が熱心に「虎

舞」の熱演を見守られていたのが印象的でし
た。

その後、11時より野外ステージにおい
て、斎藤美明さんが主宰する『the CRAZY
ANGEL COMPANY』、智春さんが主宰する
『With Love』、福島県の詩人和合亮一さんに
よる『詩の磔2012』と上演が滞りなく続
き、室内の教室では、ビヨンドXプロジェク
ト事務局長の安西直紀氏が企画・立案された
「復興学校」が開校しました。

12時半から、室内ステージにおいて岩手県
盛岡在住の坂田裕一さんによる朗読劇『12
の贈り物』の上演、その後15時から室内ステー
ジにおいて、岩手県在住の劇作家こむろこう
じさんの『水族館狂詩曲』が和田理事長監修
の元、上演されました。

フェニックス・プロジェクト Vol.5 報告

これからも

東北と

つながっていくぞ！



報告
深寅芥

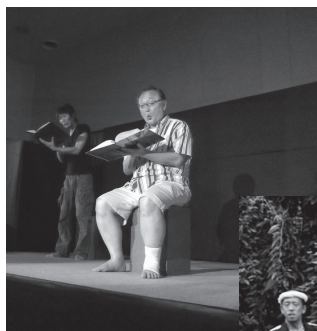
フェニックス・プロジェクト vol.5 運営代表

また、展示スペースにおいて池内莉佳子さんが
世界中から集めてきた日本への応援イラスト、写
真家ブルース・オズボーン氏の『TREE☆会い
たい』プロジェクトの写真が展示。そして、東北
物産展ですが、東北の8店舗、新宿淀橋町会さん
からは5店舗、演出者協会から2店舗、他1店舗
と合計16店舗もの出店をする事ができました。

16時半から再び野外ステージにおいて、2回目
の「虎舞」の上演が実施され、大盛況の中、閉会
式へと進み、最後まで会場にとどまってくださった
方々で記念撮影を実施いたしました。入場者数は
目標の600名に達しました。

今回のフェニックス・プロジェクトでは多くの
方々に協力して頂き、新宿摩天楼の中心で東北
の文化や食べ物に触れて頂く機会を作ることがで
き大変嬉しく思っております。

また、各地域にて活動、活躍されたボランティア



アの方々、復興を支えた方々が一同に会し、お互い
が知り合いになれた事も大きな成果の一つです。交
流会での様子をこむろこうじさんは、「東北の言葉
が自然と飛び交っていた、新宿じゃなく、岩手に
いるような感覚だった。」と後に述べられておりま
す。今後も私は、「東北とつながっていく」事を念
頭に、直接現地に赴き様々な活動を実施してい
たいと思います。1日も早い復興を切に願いな
がら、今後もフェニックス・プロジェクトに関わ
らせて頂ければ幸いです。

多くの皆様に多大なるご支援・ご協力を頂きま
した事を心より感謝申し上げます。





総会（定例）報告

2012年8月19日（日）13時～17時

芸能花伝舎 会議室1・2

進行：出席者の中から瓜生正美会員が推薦され議長となり、開会を宣言。

①2011年度活動報告

2011年度も、全国各地での事業の開催、出版事業により活動の充実を図る。協会の特別事業として『演劇大学（演出家・俳優養成セミナー）』『国際演劇交流セミナー』『若手演出家コンクール』『日本の近代戯曲研修セミナー』とともに、『第2回日韓演劇フェスティバル』を3都市で開催。また、3月11日の東日本大震災に伴い、被災地の舞台芸術家の支援を目的としたフェニックス・プロジェクトを4月に立ち上げ、6・7・8月と2012年3月にチャリティー・イベントを開催。演劇では全国の協会員が集まれる場所、という目標を持って9月に『演劇CAMP in 中津川』の3回目を開催。出版では、『年鑑・国際演劇交流セミナー2010』の編纂を実施。一般事業として、観劇案内の毎月発行を実施。協会誌「D」年間2回発行。

②2011年度会計報告

③2012年度事業計画

④2012年度予算計画

⑤その他（地域ブロック報告など）

■関西ブロック活動報告

■関西ブロック総会報告

6月29日（金）18時30分～21時30分
スタジオ315

出席：19名・委任：78名

■東海ブロック活動報告

東海ブロック総会報告

6月18日（月）

劇座スタジオ

出席：13名・委任：17名

●監査報告書

監事福田悦雄氏により、総会に適正に処理されていることを確認し、承認。

2011年度入退会者一覧（敬称略）

●会員総数673名

（2012年4月1日現在）

●入会者

水野千春、米倉真理、竹田光一、鈴木新平、菊池章友、杉山剛志、武藤美佐子、良川正美、青木淑子、齋藤陽一、金子薫、鳥越永士郎、西村洋一、四宮貴久、北川伸、鈴木義明、河田園子、横田翔、岡田敬弘、山崎哲史、村井雄、柏木俊彦、古田通子、西森良子、藤岡武洋、高橋圭司、玉井江吏香、吉本ちか子、浜口慶夫、坂井陽介、山内貴志、西村和洋、青木砂織、中島陽資、秦元樹、菜月チヨビ、勝俣美秋、千島芳彦

●退会者

中尾薫、楠本幸男、水本雄三、小林志郎、伊藤弘一、山内義夫

理事会報告

【4月9日（月）11時】

■出席者：10名

和田喜夫／木村繁／篠崎光正／流山児祥

小林七緒／瓜生正美／菊川徳之助

青井陽治／宮田慶子／渡部ギユウ

○事業報告

▼日韓演劇フェスティバル

▼若手演出家コンクール2011

最終審査

▼日本の近代戯曲研修セミナー

東京、東海、札幌

▼演劇大学 in 盛岡

▼演劇大学 in 廿日市

▼フェニックス・プロジェクト2014

▼演出家の仕事④

「海を渡った演出家たち」

▼年鑑

▼国際演劇セミナー2009 2010

○新年度事業に関して

▼演劇大学

▼若手演出家コンクール2012

▼国際演劇交流セミナー

▼日本の近代戯曲研修セミナー

▼年鑑・国際交流セミナー2011

○ソウル演劇祭での交流覚書交換に関して

○フェニックス・プロジェクト2015について

○協会誌「D」について

【6月23日（水）11時】

■出席者：9名

和田喜夫／木村繁／西沢栄治／坂手洋二

大西一郎／流山児祥／貝山武久

青井陽治／篠本賢一

○事業報告

▼日韓演劇フェスティバル 福岡、大阪

○平成24年度事業について

▼演劇大学 in 高知の報告

▼演劇大学 in 郡山 進捗

▼演劇大学 in 千葉 進捗

▼演劇CAMP in 中津川 進捗

▼国際交流セミナー「タイ特集」

▼若手演出家コンクール進捗

▼日本の近代戯曲研修セミナー 進捗

○韓国の交流について

○フェニックス・プロジェクト2015について

○総会の日程

○助成金の新しいシステムについて

【7月16日（月）11時】

■出席者：8名

和田喜夫／大西一郎／西沢栄治

青井陽治／貝山武久／篠本賢一

坂手洋二／流山児祥

○事業報告

▼若手演出家コンクール 進捗

▼演劇大学 in 千葉 進捗

▼演劇大学 in 郡山 進捗

▼フェニックス・プロジェクト 進捗

▼演劇CAMP in 中津川 進捗

▼国際演劇交流セミナー「ロシア特集」進捗

○次年度事業の方針

○日韓演劇フェスティバルについて

【8月19日（日）11時】

■出席者：10名

和田喜夫／青井陽治／大西一郎

篠本賢一／篠崎光正／流山児祥

菊川徳之助／木村繁／瓜生正美

福田悦雄

○総会の打ち合わせ

○2011年決算報告

○4～8月までの事業報告

事業予定（2012年11月以降）

11月 演出家・俳優養成セミナー
2012 演劇大学 in 大阪（12日～12月3日）

12月 演出家・俳優養成セミナー
2012 演劇大学 in 下関（8～9日／14～16日）

2013年

1月 演出家・俳優養成セミナー
2012 演劇大学 in 札幌（17～20日）

2月 国際交流セミナー2012
「フィンランド」特集（予定）

演出家・俳優養成セミナー2012
演劇大学 in 秋田（1～3日）

日本の近代戯曲研修セミナー in 東海
（22～24日）

3月 若手演出家コンクール2012
（6～10日）

日本の近代戯曲研修セミナー in 東京
（11～12日）

若手演出家コンクール2011 最優秀受賞者記念公演（13～17日）

演出家・俳優養成セミナー2012
演劇大学 in 廿日市（15～17日）

2012 演劇大学 in 札幌（17～20日）

2月 国際交流セミナー2012

「フィンランド」特集（予定）

演出家・俳優養成セミナー2012

演劇大学 in 秋田（1～3日）

日本の近代戯曲研修セミナー in 東海

（22～24日）

3月 若手演出家コンクール2012

（6～10日）

日本の近代戯曲研修セミナー in 東京

（11～12日）

若手演出家コンクール2011 最優秀受賞者記念公演（13～17日）

演出家・俳優養成セミナー2012

部会だより

事業部

「演劇大学」今年度上半期は4月の高知に始まり、郡山、千葉、福岡、大阪、盛岡と行われました。合宿形式だったり週一回ずつの連続開催だったり、内容も多彩になってきました。「若手演出家コンクール」今年度は107名もの応募がありました。若手の力試しの場として定着してきたようです。15名が一次審査を通過、ただいま二次審査中です。「フェニックス・プロジェクトvol.5」鴛田くにピヨンドXプロジェクト、芸団協との共催で、8月11日新宿の芸能花伝舎にて。岩手のチームによるリーディングや大槌町の虎舞、写真・絵画展示、東北物産展などが開催されました。多くの人が集い、共に考える場となりました。

(小林七緒)

国際部

「国際演劇交流セミナー」の例年の開催地が、やや東京に偏っていたのに対し、今年度は地方開催が増えていきます。「タイ特集」は東京・愛媛で、「モルドバ特集」は京都・金沢で、「ドイツ・トルコ特集」は東京・大阪で、「ロシ

ア特集」は兵庫で、「インド特集」は東京で、「フィンランド特集」は大阪での開催です。海外から講師を招聘してのワークショップ、レクチャーに

なかなか触れる機会のない地方において、これらは貴重な経験となることと思います。またそれらを企画運営していく意欲的な国際部員も増えてきて、部会に新しい顔ぶれが目立つようになってきました。しかし、開催地が分散し、情報がますます共有されにくくなっていることも事実です。広報部との連携により、映像記録などをホームページに保存し、協会員全員が情報を閲覧、共有できるようにすることが今後の課題です。

(篠本賢二)

広報部

協会誌の発行は協会事業の中では地味な活動ですが、粛々と皆さんのご協力をいただき、おかげさまで9号(4年半)まで積み上げることが出来ました。広報部一同ご協力いただいた方々にお礼申し上げます。次号はいよいよ「桁の太台になりますので、一層の努力を重ねたいと思います。さ

で、その他の活動として、ホームページなどがありますが、今号にも取り上げましたが、教育の現場でいよいよ近い将来、演劇が科目に加わることになりそうです。その社会的影響は計り知れないものが予想されますので、今後さらに広報部ではこの案件を注意深く追及していきたいと思えます。おそらく、演出家が最も役に立つでしょう。話は変わりますが、現在外交問題がこじれている中国と韓国に対し、協会のこれまでの事業展開で文化交流を深めてきた両国との実績が、大いに役に立つと思われるます。この実績についても広報し、さらなる文化交流を深めたいと考えます。最後に、長年の懸案であった会員との連絡方法について、メールでのやり取りが過半数を占めました。しかし、日常でメールを使用されている会員でも、協会ホームページのメールアドレス登録がまだの会員が多いのが現状です。今すぐ登録をお願いします。これにより、通信経費が抑えられるなど、協会の事業費の無駄を省くことが出来るだけでなく、作業効率も大幅にアップします。よろしくご手配の程お願い申し上げます。

(篠崎光正)

法務部

最近、厳しい経済事情から破産をする創造集団が増えてきました。私の周りでも幾つかの団体が破産に追い込まれ、そこに関わっていた演出家や関係者がほとんどお金をもらえなかったと聞いています。このままいけば泣き寝入りとなります。改めて、契約書を交わすことと、不履行の場合には返済計画や、キチンと請求するよう対応できるよう法務部で考えなければと思っています。被害を被った会員がいらっしゃったら、被害の詳細などを協会法務部あてにご連絡下さい。これからの対応を考えて行きたいと思っています。

また、様々な意見と議論のあった「劇場法(劇場・音楽堂等の活性化に関する法律)」が超党派の議員立法で成立、施行されました。文化庁は年内に具体的な指針を定めると言っています。法務部として、それを踏まえて、この法律のこれからの見据え、対応して行きたいと思っています。

(西川信廣)

地域交流部

今年も恒例の1か月のワールドツアーを終え劇団員20人と共に9・11帰国した。エジンバラ・ニューヨーク・ビクトリア・バンクーバー4都

市で開催された国際フリンジ演劇祭に『花札伝綺』(寺山修司・作)で参加した。完全に商業化したエディンバラ、ショーケース(見本市)化したニューヨークに比べて今もなお、市民ボランティア主体のビクトリア・バンクーバーフリンジに2年ぶりに参加して楽しかった。劇団若手はいつものようにホームステイ。市民との交流の中で成長してゆく演劇祭。協会はいま中津川市と組んで2013中津川国際演劇祭開催を目指している。今年の演劇キャンプで具体的な戦略を練る。市民の演劇祭!一緒にやろうぜ。地域交流部メンバー大募集!!オモシロイ事やろうぜ!

(流山児将)

教育出版部

大変お待たせいたしました。シリーズ演出家の仕事④ができあがりましたので、広報部がこのスペースをお借りしてご報告申し上げます。

「海を越えた演出家たち」

100年前、「演劇の聖杯」を求め、波濤を越えた冒険者たちがいた。川上音二郎・貞奴、島村抱月、松居松葉土方与志、小山内薫、千田是也、村山知義、佐野碩、杉本良吉、岸田國士、岩田豊雄……いったい彼らは海の彼方から何を持ち帰ったのか。

れんが書房新社刊、定価(本体2,000円+税)

速報!! 若手演出家コンクール2012

第一次審査通過者決定!!

若手演出家コンクール2012の第一次審査会(ビデオDVD審査)が、2012年8月29日午前11時より日本演出者協会事務局(新宿区・芸能花伝舎)にて開催され、議論の末、第一次審査通過者15名が決定した。

第一次審査通過者15名

審査員

- | | |
|-------------------|--------|
| IKKAN (東京都) | 青井陽治 |
| 上本志保 (広島県) | 大西一郎 |
| 河野ミチユキ (熊本県) | 菊川徳之助 |
| 額額大輔 (千葉県) | 木村繁 |
| 佐川大輔 (東京都) | 佐野バビ市 |
| SARING ROCK (大阪府) | 篠崎光正 |
| 鈴木アツト (東京都) | 智春 |
| スズキ拓朗 (東京都) | 土橋淳志 |
| 谷口健太郎 (北海道) | 西沢栄治 |
| 中村房絵 (広島県) | 橋口幸絵 |
| 日澤雄介 (東京都) | はせひろいち |
| 平戸麻衣 (群馬県) | 広田淳一 |
| ピンク地底人3号 (京都府) | 御笠ノ忠次 |
| 福谷圭祐 (大阪府) | 流山児祥 |
| 山下由 (東京都) | 和田喜夫 |



2011年度最優秀演出家、平塚直隆氏の舞台

今年度の応募総数は107名であった。第一次審査は応募者から送られたDVD等による映像審査で、各作品につき、最低3名の審査員が審査し審査票を作成し採点を行なった。

その上で審査会を開催。議論のうえ、15名の第1次審査通過者を決定した。欠席審査員は電話等で審査票補正事項発言および議論等に対応した。議事進行は実行委員長の大西一郎が行なった。

今後、11月30日までの期間で、審査員が候補者の公演もしくは公演に準ずる通し稽古を実際に観に行き第2次審査が行なわれ、最終審査進出4名(優秀賞)が決定する。

最終審査会は、2013年3月5日(火)10日(日)の期間、下北沢「劇」小劇場にてその4名による作品上演を経て公開審査で最優秀賞が決定する。

日本演出者協会 協会の事業担当 2012年8月現在

【理事長】 和田喜夫

【副理事長】 宮田慶子、流山児祥

【理事】 青井陽治、鶴山仁、大西一郎、菊川徳之助、木嶋茂雄、木村繁、鴻上尚史、小林七緒、坂手洋二、篠崎光正、篠本賢一、西沢栄治、西川信廣、深津篤史、ふじたあさや、松本祐子、山田恵理香、渡部ギユウ

【部名】 部長◆担当理事◆部員

【事業部】 小林七緒◆青井陽治、鶴山仁、菊川徳之助、木村繁、坂手洋二、篠崎光正、宮田慶子、流山児祥、◆〈東京〉千葉哲也、外波山文明、林英樹、羊屋白玉、松森望宏、〈関西〉井之上淳、金子順子、木嶋茂雄、田中孝弥、棚瀬美幸、棕平淳、森本景文、山口浩章、芳川雅男、〈東海〉鹿目由紀、菊本健郎、齋藤敏明、竹内菊、はせひろいち、トリエユウスケ、〈熊本〉亀井純太郎、山南純平、〈仙台〉渡部ギユウ、〈札幌〉清水友陽、〈福岡〉山田恵理香

【国際部】 篠本賢一◆青井陽治、鶴山仁、貝山武久、坂手洋二、堀江ひろゆき、松本祐子◆〈東京〉家田淳、ヴィクトル・ニジェリスコイ、大橋宏、金田海鶴、黒川逸朗、小林拓生、佐川大輔、佐々木治己、左藤慶、杉山剛志、中野志明、長谷川直輝、林英樹、洪明花、前嶋のの、松森望宏、森井睦、〈北陸〉岡井直道、〈関西〉井之上淳、坂手日登美、島守辰明、全リンダ、田中孝弥、棚瀬美幸、土橋淳志、山口浩章、〈東海〉佐久間広一郎、ほりみか、丸知亜矢、本島勲、〈仙台〉伊藤みゆ

【広報部】 篠崎光正◆菊川徳之助、篠本賢一、流山児祥◆〈東京〉大杉良、小川巧治朗、桑原秀一、鈴木美恵子、林未知、平尾麻衣子、三谷麻里子、緑川憲仁、〈関西〉木嶋茂雄、田中孝弥、〈東海〉ほりみか、〈新潟〉井上ほーりん、〈京都〉松宮信男、〈福岡〉糸山裕子

【教育出版部】 坂手洋二◆青井陽治、鴻上尚史、ふじたあさや、流山児祥◆〈東京〉佐々木治己

【法務部】 西川信廣◆鶴山仁、小林七緒

【地域交流部】 流山児祥◆鴻上尚史、深津篤史、山田恵理香、渡部ギユウ◆〈熊本〉村上精一、〈東海〉水野誠子、〈仙台〉なかじょうのぶ

【観劇案内】 〈東京〉遠藤栄蔵、〈関西〉木嶋茂雄、〈東海〉金子康雄

【日韓演劇交流センター委員】 小松杏里、松本祐子

【監事】 福田悦雄、〈関西〉栗田尚右、今泉おさむ

【評議員】 内山鶏、瓜生正美、貝山武久、栗山民也、中村孝夫、福田善之

【事務局長】 大西一郎【副事務局長】 篠本賢一、齋藤由夏

【事務局】 〈東京〉上田郁子、秋葉舞滝子、〈関西〉木嶋茂雄、〈東海〉金子康雄

アンケート

テーマ 教育の中の演劇

あなたが学校で演劇の授業をするならどんなことをしたいですか？

広報部では今号よりアンケート方法を変更し、全国8地区より1名ずつ8名の会員を選抜し、その方々に設定したテーマについて、400字で回答していただきます。

また、次号のアンケートに回答していただく方を紹介していただくリレー方式になります。

学校教育の中にダンスが取り入れられるというニュースは、瞬間に大勢の興味を惹きましたが、その後驚かされたのは、そのダンスのジャンルが、ヒップホップだったということです。そして、そのダンスのつぎにいいよ演劇がとり入れられます。しかもその準備は着々と進められているといえます。しかし心配なのは、いったい誰が演劇を教えるのか。ヒップホップの場合、プロのダンサーではなく学校の教諭がにわかヒップホップダンサーとなり教えているのです。

演劇はプロでも教えるのは難しいジャンルですが、もし学校の教諭が教えることになるとうなるのでしょうか。

こんな状況から今回のテーマが浮上しました。

(広報部長・篠崎光正)

九州地区 福岡

山田恵理香

私は授業で「演劇ワークショップ(以降、WS)」を平成16年から福岡市内の小学校で実施しています。幼少期にヨーロッパの学校に演劇の授業があることを知り、日本では演劇の授業がないことを疑問に思っていたので、授業として取り組める事に積極的でした。学校では勉強か運動のどちらか

が出来ないと評価されません。演劇が算数や国語、体育等と並列にあることは子供達が学校に居場所を持てる一つの要因になります。演劇の授業というと殆どの教師は「演劇＝大きな声と大きな身振り」「表現力」と思っています。私はそれは演劇の全てではなく、大事な部分でもない事を説明します。担任の理解は子供達にとって重要です。教師にも出来る限り子供達と同じ立場でWSに参加してもらおうとしています。初めは抵抗があり

ますが、体験と共に理解してもらえます。教師も子供も親もその殆どが演劇を見たことすらありません、そういう場所に「先生」としてではなく専門家の一人として行く事の重要性を認識してます。

四国地区 高知
門脇幸

現在、演劇だけでなく、ダンス、歌などにも関わっている。先日、「ダンスを教える資格」についての質問をされた。日舞では名取、バレエは伝統、エアロビクスやヨガは各団体の資格など、一般の方にも分かりやすい肩書きがある。それが良いかどうかは別として、今回取り入れられたヒップホップ以上に演劇を教えるということが、どこまで可能なのかという疑問のほうが大きいのが正直な気持ちだ。演劇＝教える人の人生観が大変大きなウエイトを占める。私がどんな授業をできるのか？台詞よりも泣く・笑う・喚く・怒るなど喜怒哀楽があってもいいんだということに時間を大半割くように思う。ネットやテレビなど一方向の情報を与えられるばかりの今の子供たちは、自分の親にさえ感情を出さないのを感じる。私は本当に悲しい、怒ってるんだ。本来ならば人間の表現としてもっとも大事な部分。生きることに大事なもの、自分を守るための表現をしていいんだーを取り入れたい。

関西地区 大阪
土橋淳志

アンケートに答える前に、まず私が学校教育と演劇をそれぞれ、どのように捉えているのかを書いてみたいと思います。

まず、学校教育とは、将来子供たちが困らないように、主に立派な労働者になるために、人間の合理化・画一化を推し進める制度と言っても過言ではないでしょう。もちろん、それは社会で生きていくためにはとても大切なことです。そして一方、演劇とは画一化や合理化とは程遠い何かです。舞台とは、人それぞれの乗り越え難い絶対的な差異が露呈する残酷な空間であり、否応なしに「みなが同じだ」ではなく「人はそれぞれ異なる」ということが再認識できます。そして、これは同時に人間の豊かさの証明でもあるのです。よって、学校教育と演劇の本質は非常に相いれない、だからこそ組合せとしては面白いと思います。

問題があるとすると、学校教育の方々が何を演劇に期待しているかで、よく話に聞くと「コミュニケーションスキルの向上」などといった具体的かつ実用的な技術の習得であるならば、何だか違うような(まるで詐欺を働いているような)気がするのです。確かに集団創作にはそういった側面が多分つきまとうのですが、むしろ演劇を突き詰めれば「コミュニケーションの不可能性」に行き着くことの方が多いのではないのでしょうか。だから、もし私が学校で演劇の授業をするなら、まずは具体的かつ実用的なスキルの習得を(私もそれなりに合理化され画一化された大人なので、やがては「コミュニケーションの不可能性」に行

き着くようなカリキュラムを組んでみたいものです。時間は要するかもしれませんが、恐らくその方が、子供たちは矛盾を抱えたまま生きるタフな労働者になるでしょうから。

東海地区 名古屋 ほりみか

演劇関係の学校と、演劇とは関係ない大学とで学生に教えています。10年間位教えている中で、ここ数年とても気になって来た事は、コミュニケーション能力、自分で考える能力の低下です。きちんとした日本語が話せない、人に伝えられない、情報の共有ができない、等です。もし学校教育で演劇を教えるとしたら、演劇の基礎である言葉のキャッチボール、感情を渡しあう、等を通してきちんとコミュニケーションが取れる人間になってほしいと思います。また、もう一つは、ゆとり教育から来る「がんばらなくてもいいんだよ。できないのも個性だから」という「がんばらない精神」ではなく、「つらくても頑張る事」の素晴らしさや、成し遂げた後の達成感を作品制作（大道具、衣裳、小道具作成も含め）を通して知ってほしいと思います。過去に数年間連続で某地方の市民ミュージカルを演出していた時、俗に言う不良で不登校の子が、ミュージカルの稽古には真面目に参加し、稽古期間中は登校する、という事象がありました。その子にとって、達成感なのか満足感なのか、何か魅力があったからではないでしょうか。

中部甲信越地区 金沢 岡井直道

私は、週三日、金沢市の中学校に特別教育支援員という肩書きで出かけています。そこで出会う中学生の多くは、照れと粋がり、攻撃と無視が日常となっているように見えます。これは思春期の性的目覚めに起因する現象でもあるようですが……。一方、先生方は、体罰、わいせつ行為に対する徹底した注意、それにパワーハラスメントやセクシャルハラスメント行為に対する認識を日々喚起させられ、生徒と互いの存在をかけたコミュニケーションをすることがとても難しい状態にあると思います。

「演劇教育」は、心と体の「接近」と「接触」を「いのちのあり方」として実践する行為です。舞台上で演じようとするその行程で「他者に届く声」と「他者を揺さぶる行為」の発見ができるかどうか？ そんな感動を手に入れるためには、手慣れた「らしさ」に陥らない指導が必要です。それは演劇の専門家による本物の指導が必要とされているということなんです。

関東地区 東京 西沢栄治

興味のない奴にも「教える」なんて私には無理だなあ、というのが第一ですが、演劇を素人の指導に任せるわけにはいかん、と危機感と使命感がムクムクともしてくるのです。おそらくクラスの中で、あの頃の私に出会うでしょうし。

体育のスポーツは苦手だけど、体を動かすこと

自体はなんか楽しくて、ちょっと変わり者だけど感受性豊かな、そんな昔のオレに似た子供たち、彼らを一瞬でもピカッと光らせてやろうと思えます。もしかひょっと、いじめが少しでも減るかもしれないし、あいyyətつぱり変な奴だな、とさらにいじめられるかもしれないけれど。

やることは、とにかく大きな声を出してみる。あと、身体を使うコミュニケーションで、その恥ずかしさと大切さを感じ取る。喋る楽しさにも必要だけれど、台詞の上手い下手はジャッジしないよう気をつける。そんな普通の現場やってて私自身もよくわかりませんから。

東北地区 仙台 渡部ギユウ

小学4〜6年を対象ならシアターゲームやインプロゲームなど、体と言葉を使って遊ぶコミュニケーションメニューからスタート。子どもたち自身が地域の歴史や営みを調査し、それを題材とするクリエイティブドラマづくり。6〜8人の小グループでシーン構成を担当し、1学級60〜70分程度のオムニバス劇「わが街」発表会を実施。装置、衣裳、小道具は最小限にして教室を会場とした発表。4年生は協同作業、5年生は会話、6年生は表現力がテーマ。ダンスと歌は必須。ダンスは舞踏でも郷土芸能でもいい。

中学生は、1年「シェークスピア」、2年「日本の古典（古事記、平家物語など）」3年「ギリシャ悲劇」をテーマに。歴史も同時に学ぶ機会にしたい。子どもに苦痛を感じさせない楽しい授業、先生方や保護者、地域の方々の理解・協力が得られる内

容を目指したい。同時に指導者の人間性も大事だろう。とても緊張しますね。あつ、まだ始まってないか。

北海道地区 札幌 城谷歩

僕は、自分が教育の現場において演劇を子供達に教えるなら、先ず「面倒くささ」を伝えたいと思います。演劇は大仰に捕らえれば、人生の縮図を最も解りやすく形作る行為の1つであるという感覚に当たり、それが如何に面倒であり、大変であり、又どれ程に面白いことであるかを知って貰う、感じて貰えるかと言う事を根底に置きたいと思っています。制作、劇作、演出、演技者、照明や音響、美術に衣裳全てのスタッフワークまでを考えるとそれぞれにおける技術や為すべき仕事は細分化され、異なる勉強が必要になる訳でそうしたテクニカルな指導は今ココで規定される字数には収まり切りません。ですから今記においては抽象的かつ精神論的な見解に終始してしまうのですが、先に挙げた面倒くささが重要なのは、其処に他者との協力、議論、価値観の相違が想定されるからであります。思うようにいかない、けれども「本番」という同じ目的の為に、それらを何とか形にして、観客の心にながしかの感動を呼び起こせるよう前進する。それらを通じて本気で生きる・生かされるエネルギーを各自身の中に発見し、養う力を自発的に持ちうる人材の育成につながれば良いと思う次第です。

新 会員紹介

(24年7月までの入会)

坂井陽介 (サカイヨウスケ)



多摩芸術学園 演劇学科卒業
所属・劇団Yプロジェクト 代表
作、演出、プロデューサー、俳優、舞台美術、照明を行なう。

1992年帰郷、島根の劇団に入団。
1999年代表を引き継ぎ劇団Yプロジェクトを創立する。

ニール・サイモンやジェームス・三木、高橋いさなどのコメディ作品を中心に演出、また、自らも劇作を行なう。

わかりやすく、楽しく、感動する質の高い作品作りを目指して活動している。

2004年からホールで舞台技術職員として勤務する傍ら劇団活動を行い、今年度から初心者、子ども向けの演劇スクールを行なう。

そのほか、劇団外では俳優として音楽家とのコラボレーションや子どもの音楽劇の作、演出なども行なっている。

HP: <http://1st.geocities.jp/gekidanypoi/>

高橋圭司 (タカハシケイジ)



所属 劇団百冠王
1974年生まれ

1993年 大阪芸術大学 舞台芸術学科ミュージカルコース 入学

1999年 大阪芸術大学大学院芸術制作研究科修了

2000年 劇団いちびり一家旗揚げ

2009年 劇団いちびり一家退団

2012年 劇団百冠王旗揚げ
今年、新たな集団を立ち上げて、ゼロからのスタートです。

刺激的な芝居づくりを目指します。

好きな食べ物は何れもライスは。

中島陽香 (ナカジマハルカ)



実験集団M・K・A・N 主宰

2009年、英国、チチェスター大学演劇科卒業。帰国後、「なんでもやってみる」をモットーに演劇ユニット実験集団M・K・A・Nを旗揚げ。『ハジメマシテ』、朗読劇『銀河鉄道の夜』を演出する。不

定期に都立飛鳥高校演劇部など高校生を中心に演劇ワークショップを行なう。
「演劇で世界を変える……いや、られればいいな」と思いながら細々活動中です。まだまだ勉強中の若輩者ですがよろしくお願いします！

西森良子 (ニシモリリョウコ)



1949年6月8日生

高校生の時、地元劇団、笛の会に入団。演劇ひとすじに生きる。

平成17年に劇団30. 創を志同くする仲間と一緒に立ち上げる。

現在、脚本・演出を担当している。自分の住むこの町をもっともっと元気にしたい。

この町で生きていく事をほこりとした。高知の事をもっと知ろう。その事を視点においた劇づくりをしています。

高知で生きた実在の人物の生き方、歴史をほりおこし創作劇にこだわっています。

これまでのあゆみ

・牧野富太郎(植物学者) 伝

・高知の綴り方の父といわれる小砂丘忠義の生涯

・土佐の生んだマザーテレサ、福祉に生きた岡上菊栄の生涯

・孤島の保健婦、荒木初子のあるいた道

・土佐の一絃琴 等です。

秦元樹 (ハタモトキ)



愛媛県新居浜市出身。劇団はぢめました。所属(役者)。

2005年に新居浜高専演劇愛好会の立ち上げをきっかけに演劇を始める。2006年『エリカ』にて初舞台。その後新居浜のミュージカル劇団、市民人権劇に参加。

2009年に高専卒業後、愛媛県松山に移動。その後は大学演劇部の公演、松山市民演劇等に参加。愛媛の演劇・舞台情報blog『カンゲキ☆案内』(<http://kangekijahime.blog.fc2.com/>)を始める。2012年に新居浜市にて『劇団はぢめました。』を立ち上げ、7月C、T、T、松山にて初公演。

演出は未経験。劇団はぢめました。にて挑戦したいと思っています。

浜口慶夫 (ハマグチヨシオ)



劇団狩潔亭(仮)所属。和歌山県新宮市出身。

1998年愛媛県松山市で劇団焼みかんを結成。旗揚げ公演に役者として参加。

藤岡武洋 (フジオカタケヒロ)



その後、劇団クロニクルに役者・スタッフとして参加しつつ、1999年劇団狩潔亭(仮)を結成。以降劇団員によるオリジナル作品を上演。本公演11作品中7作品を演出、5作品に出演。そのほか愛媛県内の未来演劇K・プロジェクトとの合同公演で演出を行う。代表作は『プラットフォーム』(2005年劇団狩潔亭(仮)作・演出作品)。

近年は客演や、舞台監督として県内の他劇団・ユニットにも参加している。

劇団MAC(げきだんまっく)代表
年齢 32才

『葵上』演出

『いかげしむ』演出

『おつげ』演出

『命を遊ぶ男ふたり』演出

『おとこ30』演出

かるぽーと開館記念 演劇合同公演『ハムレット』演出

平成17年度舞台芸術活性化事業公演

『ヘッダ・ガブラー』演出

高知県立美術館製作『誤解』出演

Theatre Lab. うち Me『人形の家』出演

Theatre Lab. うち Me 2nd 3rd『天

守物語』演出

高知演劇ネットワーク演会合同公演『橋

を渡ったら泣け』出演

他、多数の舞台作品・イベントに参加。

文化果つる国、四国・高知で演劇の面白さや深さ、現代に必要なとされるコミュニケーションを一人でも多くの方たちと共有できるよう日々あがいています。

古田通子

(フルタミチコ)



2010年より演劇ユニットボンヤリマドグチを立ち上げ、演出家としての活動を始めたばかり。ボンヤリマドグチは公演毎にチームを組んで終了ごとに解散、という活動形態で、所属劇団やジャンルにこだわらない作品作りを行う。2011年より松山市でもC. T. T. がスタートし、第1回、第5回に参加。どちらも好成績を収め、第1回ではセレクションに選出され、名古屋セレクトションへの出場も経験。演出家として少しずつ活動の幅を広げている。

脚本家としても自身のユニットの全作品は勿論、松山市民演劇コミセン夢千夜に2011年から2年連続で脚本を提供するなどの活動を行う。

11月3日〜4日に松山市待望の小劇場シアターねこにて公演予定。

村井雄

(ムライユウ)



開幕ペナントレース主宰／脚本家・演出家・俳優。目黒区職員を経て、2006年に開幕ペナントレースを旗揚げ。以降、全作品の構成・脚本・演出を担当。『パフォーマンズ』とは破壊力だ！を創作理念とし、古典戯曲等の分解・再構成を得意とする。日本固有の武道を発達させてきた身体性と、漫画・アニメ・ゲームを代表とする日本独自の文化で育った精神性の融合を意識し、エネルギーでシニールな世界を現出させる。その世界観は意味の変容を喚起する。俳優としての一面も併行がたし。2012年若手演出家コンクール2011優秀賞&観客賞のダブル受賞。同年キジムナーフェスタ2012参加。

在外研修報告 BERLIN

桐山知也

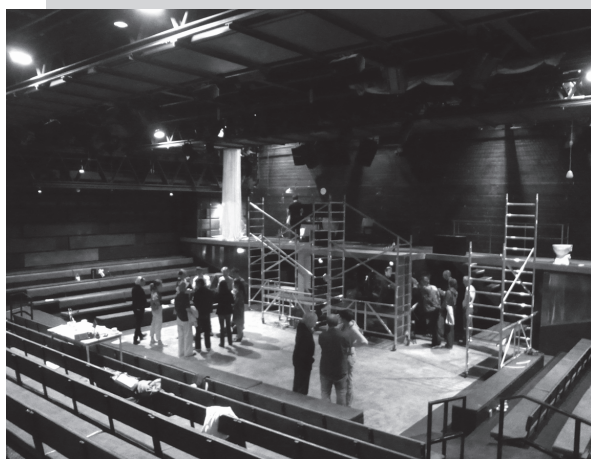


広場とそこに集う人々。研修地ベルリンで最も印象に残ったのはこのことだ。ベルリンの人々は、広場や中庭に集まって何かするのが好きなようだ。大きなところでは、東地区の目抜き通りウンター・デン・リンデンのペーベル広場では国立歌劇場管弦楽団の無料野外コンサート（発表では昨年は二万五千人が集まったらしい）、東西分断と再統一の象徴ブランデンブルク門とその前に広がるバリ広場では世界最大規模の年越しパーティー、チャップリンの『独裁者』の野外上映会、ゲイパレード、政治集会、反原発デモなどが行われていた。毎夏の風物詩ベルリンフィル野外コンサートの会場となる野外劇場ヴァルトビューネ（一万二千人収容）は、ベルリンっ子の何処かに集まって何かすることの極みのような存在だ。他にも、街角の小さな広場やアパートの中庭でも講演会や政治集会、小さな映画上映会、即席の様々なマルクト（市）などが開かれ、ベルリーナ・アンサンブルも夏に劇場の中庭でお祭りをやっていた。

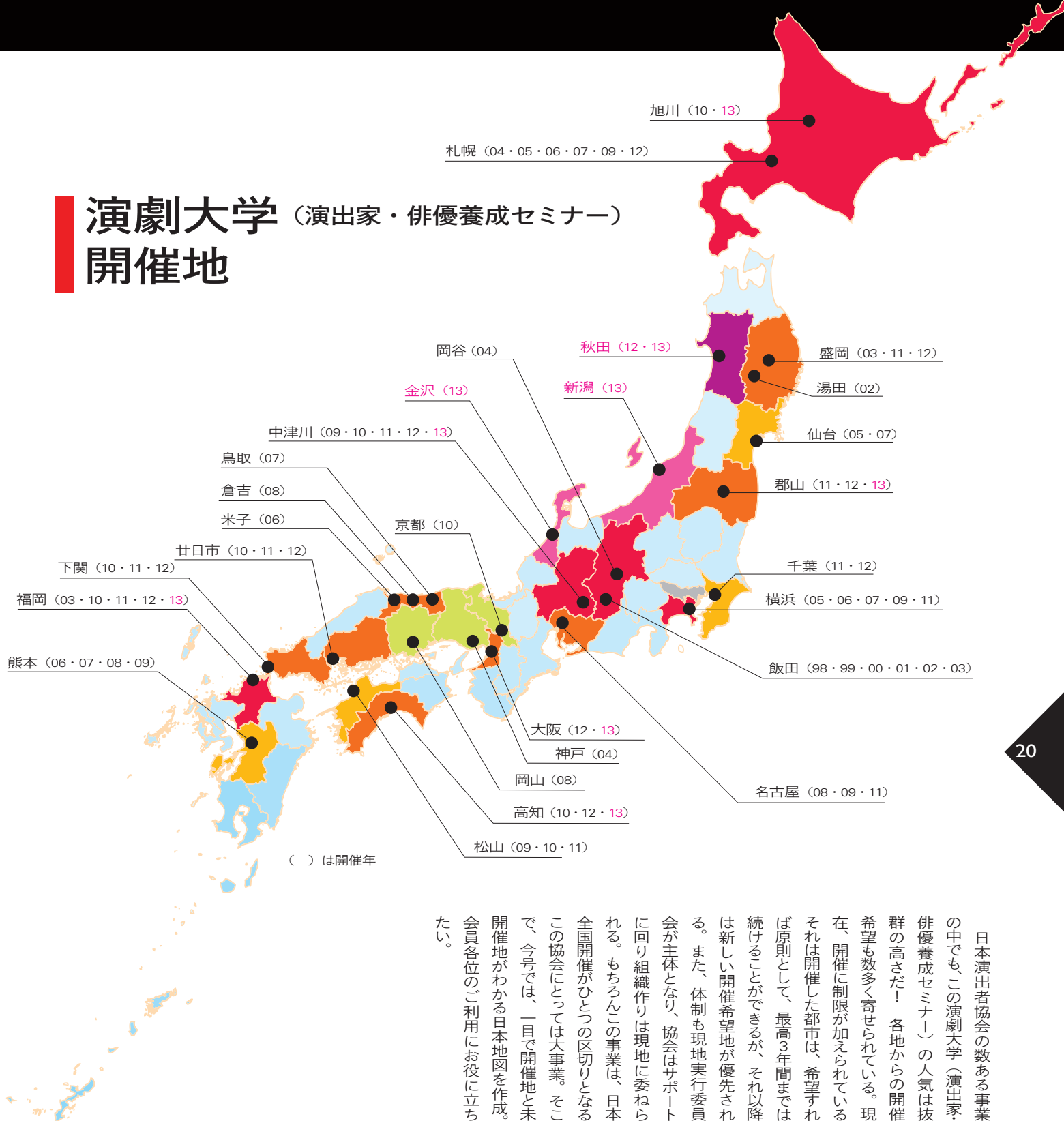
この「何処かに人々が集まる」というキーワードは、いつもぼくに、ベルリンへ出発する前に演劇キャンプで訪れた中津川のことを思い出させる。仕事の合間だっ

ただろうか、常磐座の保存会の人に「小屋も地芝居も守っていくのは大変ですね」と聞いたところ、そのおじさんは笑いながら「いやあ、ここは集会所だから、なくなったなら困るじゃない」といったことをおっしゃったのだ。その瞬間、劇場が如何に在るべきかが腑に落ちた気がしたものだ。しかし、同時に、常磐座のようにして人が集まる・集まれる場としての劇場が、日本にどれほど存在しているのだろうか、とも思ったものだ。

ベルリンの地下鉄九番線ハンザ広場駅を出た目の前にあるグリュプス劇場。そう言えば、ぼくの研修先であった「青少年のための劇場」を理念に掲げるこの小さな劇場も、ハンザ広場にある。その広場で開演を待つ子どもたちが楽しそうに遊んでいたこと、終演後に紅潮した顔で広場から駅に向かう後ろ姿を、帰国から一年近く立った今でもはっきりと思い出すことができる。



演劇大学 (演出家・俳優養成セミナー) 開催地



日本演出者協会の数ある事業の中でも、この演劇大学（演出家・俳優養成セミナー）の人気は抜群の高さだ！各地からの開催希望も数多く寄せられている。現在、開催に制限が加えられている。それは開催した都市は、希望すれば原則として、最高3年間までは続けることができるが、それ以降は新しい開催希望地が優先される。また、体制も現地実行委員会が主体となり、協会はサポートに回り組織作りは現地に委ねられる。もちろんこの事業は、日本全国開催がひとつの区切りとなるこの協会にとっては大事業。そこで、今号では、一目で開催地と未開催地がわかる日本地図を作成。会員各位のご利用にお役に立ちたい。

編集後記

▼協会の事業は好調な展開を見せている。しかし、会員数は伸び悩み、会費収入の増加は微々たる状況。これを打開するには会員が総力を挙げて募集キャンペーンを展開したいところだが、熱心な会員をどうやって勧誘するのか。会員1000人を目標にこれまで活動してきたが、新たな施策が欲しい。いや、自分が知恵を絞らなければならない。（篠崎光正）

▼仲間と一緒に尖閣諸島のニュースを見ながら稽古場近くの中料理屋で飲んでいると、店の親仁が「アナタワタシ、トモダチ」と言いながらサービスで料理を食べきれないほど出してくれた。（篠本賢一）

▼そんなに難しいことではなくってきたので協会の事業のC4中継をしたいなって思っています。生中継でなくても動画配信がやりたい。というか、自分が観たいんですけどね。叶いますように。（二谷麻里子）

▼早いもので、金沢に帰ってきて半年以上が過ぎてしまいました。膨大な劇場折り込みチラシの束でさえ懐かしく思えます。早いもので、金沢に帰ってきて半年以上が過ぎてしまいました。（小川功治朗）

▼編集スケジュール、編集体制を万全に臨んだはずの今号。しかしいろいろずれ込み、しかも編集部員は増えず：ローマは一日にしてならずですなあ：（大杉良）

▼毎度思いますが、演出者だけで構成する集団というのは、メールのやりとりひとつ取っても、それぞれの世界観が混ざり合ってカオスな雰囲気。稀有な集団ですね。（緑川恵仁）